九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古月貝塚３次調査における人骨出土状況からみた葬送行為

舟橋，京子
九州大学大学院比較社会文化研究院

米元，史織
九州大学総合研究博物館

高橋，寛宇
九州大学大学院地球社会統合科学府

米山，玲緒
九州大学大学院地球社会統合科学府

https://doi.org/10.15017/7409232

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 23, pp.141-147, 2026-03-31. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学総合研究博物館研究報告第23号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.23, 2026, pp.141-147

古月貝塚３次調査における人骨出土状況からみた葬送行為

舟橋　京子[1)*]・米元　史織[2)]・高橋　寛宇[3)]・米山　玲緒[3)]

[1)]九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財センター：〒819-0395 福岡市西区元岡744
[2)]九州大学総合研究博物館・九州大学アジア埋蔵文化財センター：〒812-8581福岡市東区箱崎6-10-1
[3)]九州大学大学院地球社会統合科学府：〒819-0395 福岡市西区元岡744
*funahashi@scs.kyushu-u.ac.jp

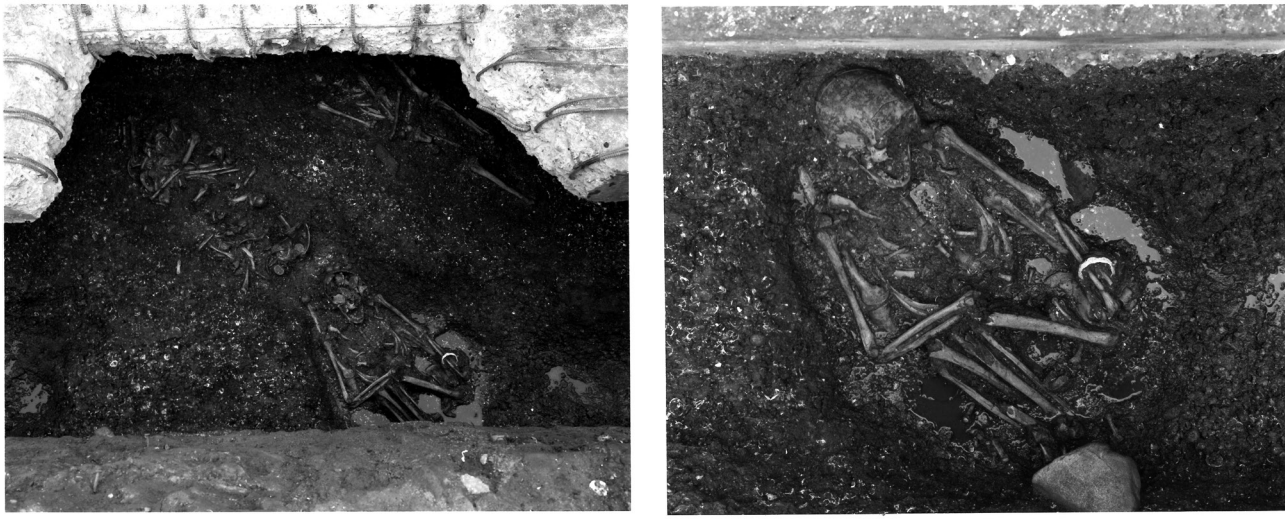
要旨：福岡県鞍手町大字木月に所在する古月貝塚の３次調査において，縄文時代後期に属すると考えられる人骨が近接した位置から，２群に分かれて５体出土した。本稿では，その人骨の出土状況に関して検討を行った。その結果，北側人骨群の１号・２号・３号人骨のうち，１号人骨と２号人骨は短いながらも時間差をもって埋葬されたことが推定された。南側人骨群の４・５号人骨に関しては，２体ともに筵の様なもので包まれていた同時埋葬の可能性と，４号人骨のみが筵の様なものに包まれた状態で埋葬され，時間が短いながらも時間差をもって埋葬された合葬例である可能性が考えられた。以上の出土状況から本遺跡のような合葬例は，同時埋葬による合葬と一定度の時間差をもって埋葬が行われた部分骨合葬の中間的な様相である可能性が考えられた。加えて，既報告による５体の性別から，これらの個体は全て男性であり，時間的空間的に近接して埋葬されていることから，男系の親族関係を媒介とする集団ないしは男性の非親族ソダリティー（生業や儀礼集団など）のような社会的地位・集団を表象する特異な埋葬事例の可能性を指摘した．

キーワード：人骨出土状況，縄文時代後期，古月貝塚，合葬

１．はじめに

福岡県鞍手町に所在する古月貝塚（旧遺跡名木月貝塚）は古くから貝塚の存在が知られている．遺跡の概要と歴史的な変遷は古後憲浩氏による報告（古後1994：2001）があるが，その沿革について以下概略を見てみよう．古月貝塚は古くは『筑前國續風土記』に「下木月村」所在の「貝殻圃」として記述されている．本遺跡の発掘調査は第１次調査が1920年（大正９年），第２次が1962年（昭和37年）に福岡県によって行われ，第３次調査が1993年（平成５年）に鞍手町教育委員会により行われている．このうち第２次では１体，第３次調査では５体の縄文時代後期に比定される人骨が出土しており，第２次調査に関しては九州大学医学部第二解剖学教室，第３次調査に関しては九州大学大学院比較社会文化研究院の中橋孝博氏へと依頼があり人骨の調査・取り上げが行われている．

これらの出土人骨の形質人類学的な特質に関しては，米元史織が検討・報告を行っている（米元2025）．一方で，第２次調査の人骨の出土状況に関しては『鞍手町誌』（1974）において報告がなされているものの，第３次調査においては，人骨の考古学的な出土情報に関しては，前出の古後氏と第３次調査を指導した福岡県教育委員会の小池史哲氏（当時）により，人骨の調査・取り上げにあたった中橋氏の所見に基づく概要が報告されているにとどまる（古後前掲；小池1995）．このことから，本埋葬の詳細な時期に関しては本貝塚の主要な形成時期である後期であり、より詳細な時期に関しては今後の検討課題とされている（古後前掲；小池前掲）．したがって，本報告では鞍手町歴史資料館に保存されている発掘当時の写真資料および中橋氏により書かれた図面・出土所見を基に人骨の出土状況から葬送行為を復元・報告するものである．なお，各個体の年齢性別の記述は人骨の報告（米元2025）に従う．



写真図版１（左：人骨出土全体写真、右：１号人骨出土写真　鞍手町教育委員会提供）

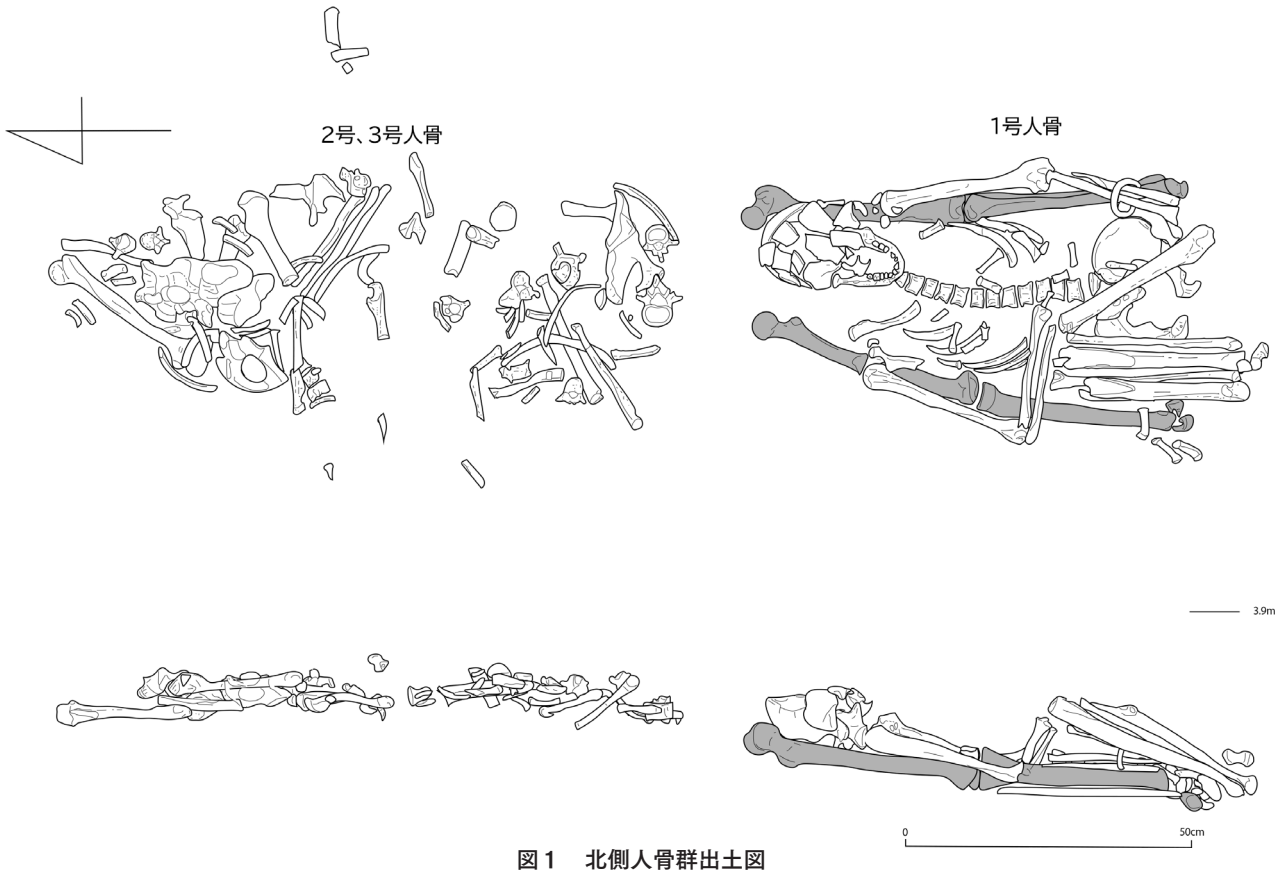


図１　北側人骨群出土図

（原図を高橋がトレース作図、網掛：2号人骨下肢骨）

２．人骨出土状況

第３次調査は，1993年９月に宅地の擁壁造成工事に伴い貝層が露出したため調査が行われた．調査範囲である擁壁のコンクリート打ちの範囲において，南北14m，東西12m の貝層が確認され，そのうちの南北に延びる掘削面より人骨が５体出土した（写真図版１）．人骨は２か所から複数個体の人骨がそれぞれ出土している．北側の人骨群を１・２・３号，50㎝ほど離れて南側から出土した人骨群を４・５号人骨として，それぞれ出土状況を記述する．なお，５号人骨の上半身は発掘調査区外に続いており，今回の調査では検出には至っていない（古後氏私

信).

① 北側人骨群（図１）：北側人骨群は南側から出土している全身出土している屈葬個体を１号人骨（熟年後半から老年男性)，下肢が１号人骨下位から出土している個体を２号人骨（熟年後半男性)，人骨群北側の２号人骨上半身とともに散乱した状態で出てきている個体を３号人骨（成年前半男性）とする．

北側人骨群内南側からは１号人骨が，頭位を北東にし，仰臥屈葬の状態で出土している．１号人骨は全身がほぼ関節状態を保っており，左上肢は肘関節を伸展，前腕を回内し体側に沿わせた状態である．右上肢は肘関節を屈曲，前腕を回内し，手を腹部付近に置いた状態で出土している．下肢は左右ともに股関節および膝関節を強屈し，膝を右腹部付近にひきつけた右側に倒した状態で出土している．１号人骨の左前腕には貝輪が１点着装された状態で出土している．

１号人骨の直下からは，２号人骨の下肢が出土している．２号人骨の下肢は，大腿骨以下が関節した状態で出土している．左下肢は，左大腿骨近位部が１号人骨の頭部左側直下に位置し，左脛骨近位が１号人骨左前腕部遠位直下に位置している．全体として２号人骨の左下肢骨は１号人骨の左上肢に沿うようにその直下から出土している．２号人骨の右下肢骨は，右大腿骨近位が１号人骨の頭部北西側に位置し，脛骨遠位が２号人骨の下腿部北西側に位置しており，右下肢は外旋し骨頭を上に向けた状態である．全体として２号人骨の右下肢は１号人骨の右上肢の下部付近から下肢北西側に位置している．

これら１号人骨および２号人骨下肢の10㎝北側の１m×0.5mの範囲から，２号人骨の頭蓋骨・上半身・左右寛骨及び３号人骨がほぼ散乱した状態で出土している．これらの散乱した人骨に関節状態を保っている部位は全く含まれていない．

したがって，これらの位置関係から２号が伸展葬で埋葬された上に１号が屈葬で埋葬されていると判断できる．ただし，１号人骨の頭部が２号人骨の左右大腿骨頭の間に位置し，大腿骨頭とほぼ同じレベルから出土しているにもかかわらず，２号人骨の寛骨は取り去られ３号とともに離れた位置から出土している．仮に１号が埋葬された段階で２号がいまだ一次葬の状態であった場合，１号の頭部の下には10㎝程度の高さをもった恥骨が位置することから，その頭部から頸部はかなり浮き上がった状態になるはずである．この状態から頭部直下の２号の寛骨臼が引き抜かれた場合には，１号の頭蓋が後頭部側即ち北側へ転じる或いは寛骨が引き抜かれた頭部直下の空間に落ち込むという可能性が考えられるが１号人骨の頭蓋から上部胸椎は確認しうる限りそのような乱れは読み取れず，顎関節も関節した状態のままである．したがって，２号は１号の埋葬時には既に左右寛骨が取り去られた後，即ち股関節が外れる程度には軟部組織の腐朽が進んでいた可能性が考えられる．ただし，２号と１号の間に貝層を挟んでいないことから，１号が埋葬される際には２号上にはあまり土が堆積していなかった，あるいは本来堆積していた土が寛骨を含めた上半身の骨を移動させる際にはぎ取られており，その後に１号が埋葬されたと推定される．

なお，２・３号人骨の集積の上にはイノシシの頭蓋骨が頭蓋底側を上，顔面を南に向けた状態で出土している．加えて，小池氏が「東側拡張部分は約1.3m低い隣接地であるためか上部を攪乱されていて、人骨にもかなり攪乱がみられる。」（1995）とされていることから，２号の上半身及び３号人骨に関しては　現状の散乱状態が１号埋葬時の２・３号の埋葬状態ではなく，１号埋葬後の攪乱を経た状態の可能性も考えうる。

② 南側人骨群（図２）：南側人骨群は下から出土した個体を４号人骨（成年後半男性)，上から出土した下肢のみ検出に至った個体を５号人骨（成年男性）とする．４号人骨は頭位を北東にし，仰臥屈葬の状態で出土している．４号人骨は全身が一部を除いてほぼ関節状態を保っており，上肢は右前腕部は二次的に位置が乱されているものの，左上肢は肘関節を屈し，下肢は股関節と膝関節を軽屈し膝を外側に開いた状態で出土している．なお，左膝関節は外れた状態であり，大腿骨遠位を基準に考えると脛骨・腓骨の近位が10㎝程度股関節側から出土している．右大腿骨は遠位側が本来の位置からは動かされているものの近位は右寛骨とほぼ関節状態を保っている．この右大腿骨骨頭から右脛骨近位端までの距離は，膝関節を伸展した状態であれば大腿骨の長さ（約40㎝）程度離れているはずが，実際には約20㎝程度しか離れていない．したがって，右大腿部付近が乱される以前には，右膝関節に関しても左同様に大腿骨遠位側と脛骨近位側が交錯した状態であったと推定される．なお，４号人骨の右前腕及び右大腿骨は本来の埋葬位置からは動いており，尺骨

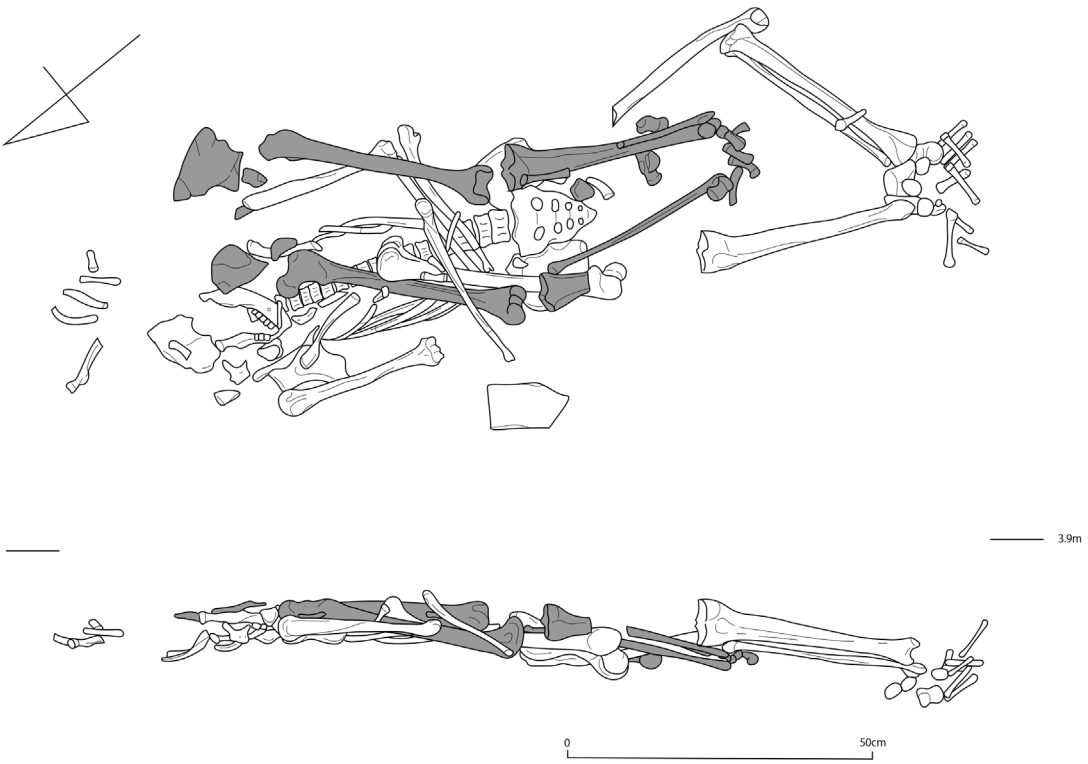


図２　南側人骨群出土図

（原図を米山がトレース作図、網掛：5号人骨）

は近位を東側（左肘関節側），遠位を西側（右上腕骨遠位側）に向けた状態で，後述する５号人骨の右大腿骨直上から出土している．右橈骨は頭蓋の北側のほぼ頭蓋と同じレベルから出土している．加えて，４号人骨の右大腿骨は，近位側は右寛骨と解剖学的な位置と矛盾がないものの，遠位が膝関節側ではなく頭蓋側に位置し大腿骨遠位側が上半身上に載った状態である．

５号人骨は寛骨側を北，足先側を南側にし，股関節・膝関節をほぼ伸展した状態で出土している．５号人骨の寛骨から膝関節は４号人骨の上半身直上から出土しており，下腿部は４号人骨の腹部上および左右膝関節の間から出土している．５号人骨の遺存している寛骨以下趾骨までの部位はほぼ関節状態を保っているが，右脛骨の遠位側４分の３が遺存していない状態である．

以上の出土状況から，各個体の埋葬状況を復元する．まず４号に関しては，左膝関節に見られるような脛骨と大腿骨が関節状態を保っておらず交錯した状態は，軟部組織腐朽時に遺体の周りにある程度空間があったことを想起させるものである．このような膝関節の乱れは弥生時代の甕棺墓などにおいてしばしば認められる．一方で縄文時代の身体周辺に空間ができるような埋葬方法として岡山県津雲貝塚の埋葬姿勢に関する検討の中で清野謙次氏により棺や槨のような身体回りに空隙を生ずる埋葬施設の可能性が指摘されている（清野1920）．本遺跡においても明瞭な埋葬施設の痕跡は報告されていない．ただし，本遺跡と同じ北部九州の縄文時代早期の佐賀県東名遺跡（佐賀市教委2016）や後期の久留米市正福寺遺跡（久留米市2006）などで出土している植物素材で編まれた目の粗い面的な製品「筵」（堀川2011など）であれば，有機質で軟部組織とともに腐朽した可能性は考えうる．したがって，４号人骨は埋葬時に股関節を軽屈し膝関節を屈した状態で筵の様なもので巻いて埋葬されていた可能性が考えられる．

発掘時には，これらの２体の埋葬の時間間隔に関しては，これらの個体の間にほとんど貝層を挟まないことから同時埋葬の可能性が想定されている．これらを同時埋葬と考えた場合，４号の筵外に５号が埋葬された場合には，４号の膝が屈曲・立膝状態であることから４号の膝部上にあたる５号の足首側のレベルが５号の膝側に比べて高くなるはずである．ただし，側面図を見ると５号の膝部と足首側は膝側より低く，逆に膝部の方が５㎝程度高い．一方で，筵の中に４号・５号が一緒に包まれてい

た場合には，４号の腹部に載っている５号の膝部と４号の下肢の間に位置する５号の脚部では，埋葬時には脚部側が低く，膝部側は４号の下腹部の厚みで高くなる．このような状況は上述の膝関節の出土状況に合致している．したがって，同時埋葬の場合には２体ともに筵の様なものに包まれて埋葬された可能性が考えられる．一方で，４号と５号の埋葬の間に時間差があった場合には，５号は，４号が屈葬で埋葬された後，４号の膝関節が関節状態を保っていないなど少なくとも軟部組織の腐朽が一部進んだ段階で埋葬されたと推定される．その場合，①間に貝層が入っていないこと，②５号の下腿部が４号の下肢より下位のレベルから出土していること，③５号埋葬時に４号の遺体の覆土が遺体近くまではがされているものの遺体が乱されることなく５号が埋葬されていることから，その埋葬間隔は短いと推定される．

さらに，４・５号が埋葬された後に５号の右下腿部と４号の右前腕及び大腿部が重なった付近が攪乱を受け遺体が乱されたものと推定される．なお，この攪乱に関しては，調査者によると人骨直上の改葬に後世の攪乱の痕跡は認められない（古後氏私信）。したがって，同時代の墓の掘り返し行為であり，上述の２・３号の攪乱と軌を一にしている可能性も考えられる．このような特定の場所への繰り返しの墓の造営に伴う先行する墓ないしはそこに埋葬された被葬者の遺体の破壊に関しては，時期・地域的に近い事例では山鹿貝塚の15号と16号墓あるいは17号墓と18号墓の事例（九大解剖1972）があげられる．

３．葬送行為の復元

以上みてきたように北人骨群及び南人骨群共に１号・２号および４号・５号は強屈肢葬個体と伸展葬個体，伸展葬個体と軽屈肢葬個体が，同時ないしは埋葬間隔が短いながらも時間差をもって埋葬されたことが推定された．このように埋葬姿勢の異なる個体が近接して埋葬される例は近隣の縄文時代後期の貝塚遺跡である福岡県山鹿貝塚や桑原飛櫛貝塚にも散見される．また，合葬例に関してもこれらの遺跡で類例がみられるが，両遺跡ともに成人と未成人の合葬という事例である．縄文時代の成人合葬に関しては，小林行雄氏により墓壙掘削の省力化とする説（1951）と春成秀爾氏による出自を同じくする個体ないしは夫婦であるとする説（春成1980）が見られる．春成氏は合葬個体間における抜歯歯種の共通性から合葬個体は出自集団を同じくする個体であるとの指摘がなされている．一方で，今回の様な埋葬姿勢の異なる個体に関しては夫婦等出自が異なる可能性を指摘している．その後舟橋により抜歯型式が出自ではなく，半族（親族ソダリティー）ないしはジェンダーに基づく非親族ソダリティーであった可能性が明らかになっており（舟橋2009），これらの社会集団を背景とした葬送行為であれば合葬個体に血縁関係のある個体とない個体の両方が含まれる可能性が考えられる．これは，その後の歯冠計測値およびDNA分析の結果，血縁関係のある個体とない個体の組み合わせの両方があることが縄文時代および続縄文時代の埋葬において確認されているという分析結果（adachi et al.2003；Adachi et al.2006；山田2025など）と矛盾しない．

一方で，縄文時代および後続する弥生時代の一部の時期・地域においては部分骨合葬とされる意図的あるいは非意図的に先行する墓の破壊に至り，破壊した先行する墓から出土した人骨の一部を後続して造営する墓に合葬する行為がみられる（山田2013）．本事例は４・５号人骨に関しては同時埋葬の可能性も残されるものの，両合葬事例ともに短時間の時間差を持った合葬の可能性のある事例である．加えて，後続する埋葬行為の際には先行して埋葬された個体はほとんど乱されていない．したがって，本事例は合葬の可能性を残すとともに，同時埋葬による合葬と時間差を持った２基の埋葬による行為の所産である部分骨合葬の中間的な行為として位置づけることができよう．加えて，本事例は既に米元が既に報告しているように出土個体が全て成人男性であり（米元2025），今回明らかになったように近接して埋葬された合葬事例であることから，この５体が一般的な埋葬ではなく，男系の親族関係を媒介とする集団ないしは男性の非親族ソダリティー（生業や儀礼集団など）のような何かしらの社会的な地位・集団を表象する特異な埋葬事例の可能性が考えられる．このようなジェンダーが表象された縄文時代の時期の近い埋葬例をみると，一般的な墓における空間的な偏りとしては縄文晩期岡山県津雲貝塚の性別による空間的偏りがある（渡辺1973など）．一方で特殊な埋葬に関しては，後期茨城県中妻貝塚の多数再葬墓で男性が多くみられる事例（松村・西本1996）や後期千葉県

草刈貝塚の廃屋墓への被葬者の選択や廃屋墓被葬者の頭位方向におけるジェンダーの相関事例（石川2024）などが知られている．また，抜歯型式の社会的意味の多様性（ジェンダー／半族）（舟橋2009など）も加味するならば，本事例は縄文時代の後期社会における社会集団・社会関係の多様なありかたを示す一例かもしれない．今後の類例の増加を待ちたい．

４．おわりに

古月貝塚遺跡３次調査における出土状況の検討の結果，以下の点が明らかになった．

① １号・２号・３号人骨のうち1号・2号人骨は，時間差をもって埋葬された合葬である．

② ４・５号人骨は同時ないしは時間差をもって埋葬された合葬であり，４号のみないしは４・５号がともに筵様のものに包まれていた可能性がある．

③ これらの合葬は通常の同時埋葬による合葬と部分骨合葬の中間的な様相を示す可能性がある．

④ ３次調査出土人骨は５体いずれも男性であることと時間的空間的に近接して埋葬されていることから，男系の親族関係を媒介とする集団ないしは男性の非親族ソダリティー（生業や儀礼集団など）のような社会的な地位・集団を表象する特異な埋葬事例の可能性が考えうる．

謝辞

本報告執筆にあたっては，発掘調査に携わった古後憲浩氏および小池史哲氏から発掘に関する情報資料をご提供・ご教示いただいた．この場を借りて謝意を表したい．また，本報告は人骨の図面・所見の作成および取り上げという発掘現場における精緻な作業とその記録が残されていて初めて可能になったものである．本遺跡においてこの作業を担当された中橋孝博氏は，著者らが本稿の執筆作業を行っていた2025年９月に急逝された．この場を借りて氏の学恩に深謝するとともに哀悼の意を表したい．

本報告は令和６年度九州大学の研究補助者雇用支援および科研学変（A）統合生物考古学（23A102）を受けた成果である．これらの制度にも改めて謝意を表する．

参考文献

Adachi N., Dodo Y., Oshima N., Doi N., Yoneda M., Matsumura H., 2003: Morphologic and genetic evidence for the kinship of juvenile skeletal specimens from a 2,000 year-old double burial of Usu-Moshiri site, Hokkaido, Japan. Anthropological Science, 111-3: pp.347-363.

Adachi N., Suzuki T., Sakaue K., Takigawa W., Oshima N., Dodo Y., 2006: Kinship analysis of the Jomon skeletons unearthed from a double burial at the Usu-Moshiri site, Hokkaido, Japan. Anthropological Science, 114: pp.29-34.

石川健2024：『列島先史社会論と民族誌　民族誌的類推の批判的運用をめぐって』すいれん舎．

清野謙次1920：「津雲貝塚における人骨出土状況」『京都帝國大学文学部考古学研究報告』5：pp32-63，京都帝國大学．

九州大学医学部解剖学教室 1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団．

鞍手町誌編集委員会1973「古月貝塚」『鞍手町誌　上巻』鞍手町，福岡県．pp69-74.

久留米市文化観光部文化財保護課 2008：『久留米市文化財調査報告書272：正福寺遺跡』久留米市教育委員会

小池史哲1995：「古月貝塚の発掘調査」『古文化談叢』278頁

古後憲浩1994：「古月貝塚の調査」『郷土直方』第23号，pp12-14.

古後憲浩2001：「古月貝塚の調査」『第11回九州縄文研究会　熊本大会　九州の貝塚』九州縄文研究会・肥後考古学会 pp8-9.

小林行雄 1951:『日本考古学概説』東京創元社，東京．

佐賀市教育委員会 2016：『佐賀市埋蔵文化財調査報告書100：東名遺跡群４　東名遺跡群総括報告書』佐賀市教育委員会

春成秀爾 1980：「縄文合葬論」『信濃』第 32 巻第 4 号，pp1-35

松村博文・西本豊弘1996：「中妻貝塚出土多数合葬人骨の歯冠計測値にもとづく血縁関係」『動物考古学』第６号，pp1-17.

福岡市教育委員会 1996：『福岡市埋蔵文化財調査報告書480：桑原遺跡群』福岡市教育委員会

舟橋京子　2009：「古人骨資料から見た縄文時代の社会集団」『考古学研究』56－2，pp12-27.

堀川久美子　2011：「日本における遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『植生史研究』20-1．pp3-26.

米元史織　2025：「古月遺跡出土人骨の形質的特徴」『九州考古学』第100号，pp.169-178.

山田康弘2013：「縄文時代における部分骨合葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集，pp57-83.

山田康弘2025：「DNA の分析結果に基づく縄文時代の合葬・単葬例の検討」『縄文時代』36．pp31-41.

渡邉誠1973：『古代史発掘２　縄文土器と貝塚』講談社，東京．

Received Oct. 29, 2025; accepted Dec. 21, 2025

Mortury practices as seen from the human bones unearthed during the third survey of the Furutsuki shell mound

Kyoko FUNAHASHI, Shiori YONEMOTO, Hirotaka TAKAHASHI, Reo YONEYAMA

Faculty of social and cultural studies, Kyushu university
744 Motooka, Nishi-ku, Fukuoka city 819-0395
funahashi@scs.kyushu-u.ac.jp

During the third survey of the Furutsuki Shell Mound located in Kitsuki, Kurate Town, Fukuoka Prefecture, five human skeletons were excavated in two groups from a location close to human bones dated to the late Jomon period. This paper examines the mortuary practice and depositional process based on the archaeological record of these human remains. The results indicate that among the three sets of human remains (Nos. 1, 2, and 3) in the northern group, No. 1 and 2 were buried at different times, albeit within a short period. Regarding No.4 and 5 human remains in the southern group, it was considered possible that both were buried simultaneously wrapped in a botanical mat-like material, or that only the No.4 human remain was buried wrapped in a mat, representing a case of joint burial with a short time interval between No.4 and No.5 burials. Based on the above excavation findings, it was considered that the joint burial examples at this site may represent an intermediate form between simultaneous burial and partial bone joint burial with a certain time lag. Additionally, based on the reported biological sex of the five individuals, all of whom were male, and the fact that they were buried in close temporal and spatial proximity, it was suggested that this could represent an extraordinary burial case symbolizing social status or group affiliation, such as a male-line kinship group or a male non-kinship solidarity (e.g., occupational or ritual groups).

Key words: archaeological record of these human remains, Late Jomon period, Furutsuki Shell Mound, joint burial, non-kinship solidarity